

『さすらう若者の歌』と『冬の旅』

渡辺美奈子

(文学博士・ドイツ文学・横浜薬科大学講師) Minako Watanabe

マラーと長年にわたり親しい信頼関係にあったナターリエ・パウアー＝レヒナーによれば、「マラーは、常に苦悩と非常に過酷な内的体験からだけ作品が萌え出たと語った」という。とりわけ『さすらう若者の歌』は、作曲家自身の詩ということもあって、マラーの体験が色濃く現れた作品である。確かに詩作品には、詩人自らの思いが何らかの形で織りこまれていることが多い。シューベルトの連作歌曲『美しき水車小屋の娘』および『冬の旅』の詩人で知られるヴィルヘルム・ミュラー（1794～1827）は、彼の最初の詩集『同盟の華』冒頭詩で、「己を明かすこと それは詩人の喜び」と綴った。むろん詩には体験が直接描かれるのではなく、詩人の豊かな知識や教養の上に、韻律が考慮された上で詩句が選ばれ、追憶や苦悩などの個人的な心情が込められているのである。

1883年からマラーが音楽監督として働いていたカッセル歌劇場のコラトウーラソプラノ歌手ヨハンナ・リヒターへの失恋を、マラーは、1885年1月1日に友人フリードリヒ・レーアに当てた手紙の中でほのめかした。「僕は連作詩を書いた。さしあたり6篇あって、すべて彼女に捧げられている。彼女はこれらの詩を知らないのだが、この連作詩は、彼女が知っている以外の何を、彼女に語るができるだろう。最後の詩を同封しよう。ことは足らずで、わずかな部分さえ伝えることができないのだが。——これらの詩は、あたかも、運命を負った遍歴職人が旅に出て、あてもなくさまようかのようにまとめられている」。

この手紙で「詩」と訳したことは、原文では Lied/Liederである。叙情詩 Lyrik が堅琴すなわちリラ Lyraを伴って吟じられることに由来するごとく、元来、詩と音楽は切り離せないものであり、その伝統が残っていたためか、ゲーテやミュラーの時代には、詩も歌曲も Lied/Liederと表現されることが普通だった。マラーのことばもその流れを受け継いでいる。日本語の「歌」

が、和歌や短歌も意味することと同様である。この手紙を書いた時、マーラーはすでに作曲を手がけていたと考えられるものの、「ことば足らず」と書かれていることから、少なくともレーアに同封するのは詩と思われる。後にマーラーはこれら6篇の詩から4篇による歌曲集を完成した。

『さすらう若者の歌』において、失恋をした遍歴職人が、暗闇の中、独り寂しく旅に出てリンデの樹(リンデンバウム/西洋菩提樹)の下で憩いを見出すという筋は、おそらくミュラーの『冬の旅』を意識したものである。音楽においても、『冬の旅』と同じ二短調で始まる。だが先に掲げた手紙が真冬に書かれたものであったのに、マーラーの詩は春の風景とともに歌われる。『冬の旅』では、花が枯れ、川も路面も凍結し、旅人の凍てつく心と自然が同様であるのに対し、マーラーの春の旅では、小鳥の歌、花々、緑の野など、生き活きとした自然と旅人の心の対照が顕著となる。恋人を失い、時間とともに悲しみが癒えるどころか、喪失感が増すばかり。花々が咲き誇り、小鳥の声が聞こえると、かえって孤独と悲哀に満たされる……。

もっとも『さすらう若者の歌』では、第1曲前半に、アルニムとプレナーノによって編纂された『少年の魔法の角笛』の「愛しい人が婚礼をあげるとき」が、冒頭から第2節まで取り入れられている。マーラーは、この詩句を使い、一部変更や加筆をして第1曲をまとめ、『冬の旅』と同様、「さすらい」、「リンデの樹」、「遍歴職人」といった、ドイツ語詩独特の情緒を表現しながら、連作歌曲を

作り上げたのだった。

『冬の旅』では、主人公が深夜、恋人との思い出深いリンデの樹の前を通る。市門の傍にあるため、どうしてもその樹の傍を通らなければならなかったのであり、旅人は暗闇だというのに眼を閉じた。すると若者には小枝のざわめきが聞こえる。ここで安らぐように、との誘いだが、季節は冬。葉は落ちているので、実際は幻の音である。極寒の最中、樹の下で安息を得たなら、死を望んでいた主人公には、その願いが容易に叶えられるはずであった。だが彼は振り向きもせず、旅を続けた。遠く離れても、その耳には、いまだリンデの誘いが聞こえる。その後彼は、鬼火による同様な誘惑に遭うが、やはり死を拒む。主人公が真に求めたものは、「鴉」や「宿」において「誠実な旅の杖」等の詩句で明らかにされる、死に至るまでの誠実であり、実直な愛であった。民謡でよく使われるモチーフでもある。老楽士に主人公が声をかけ、未解決のまま終わる『冬の旅』には、苦しみを苦しみのまま受け止めようとするミュラーの姿勢が現れている。

一方『さすらう若者の歌』の主人公は、街道にあるリンデの樹の下で安らかな眠りにつく。第2曲とともに、マーラーがその音楽を第1交響曲に取り入れた、連作歌曲最後の部分である。「花びらが雪のごとく舞い落ち……すべてがまた良くなった」と、主人公は、『冬の旅』の若者が拒んだロマン的な死の救済を受け入れる。だが音楽においては、「すべてがまた良くなった」につけられた半音階的下行が悲嘆や苦悩を表現しており、詩と音楽との葛藤が見られる。詩

句を繰り返し、行きつ戻りつした旋律は、次第に安らかになっていくものの、詩句ごとに挿入された休符が、主人公の息絶えて行く様子を表すように思われる。後奏は、低音による同音反復の後、震えるようなスタカートと、すすり泣きを思わせる休符を伴って再び葬送のリズムを打ち鳴らす。詩で肯定した救済を、詩人自ら音楽で否定するかのよう、この作品は、悲哀と苦しみそのまま静かに終わる。



▲1826年にキュレンが描いたシュベールの肖像

ミュラーは1815年の日記で、「もし僕が詩に旋律を付けることができたなら、僕の詩をもっと気に入るだろう。でも安心するとしても、同じ感情を持った心に行き着くことができる。その心はことばから旋律を聴き出し、それを僕に返してくれる」と記していた。ミュラーは作曲することができなかったが、詩句の意味だけでは表しきれない詩情を、韻律や詩句の音でも表現した。このことはむしろ、ゲーテやハイネの詩にも見られる。詩情だけではなく、詩句自体の音やリズムが、多数の作曲家の心を惹きつけたのであった。他方マーラーの詩では、同語韻や不規則な押韻が多い。第3曲では脚韻を踏まらず、頭韻すなわち強音を持つ音節の始頭音が互いに同じ音による押韻が考慮されているものの、韻を踏んだ語同士の関係が深いとはいえず、詩を詩として読むには、音楽的とは思えない。けれどもマーラーは、詩で言い尽くせない感情を、自ら作曲で表現することができた。『さすらう若者の歌』においては、詩と音楽がどの歌曲集にも増して切り離せないものと言えるだろう。この詩と音楽の一体感が、歌曲史ならびに文化史において、この作品をかけがえのないものにしていくのだ。